追稿

遊ひ紙　全

趣好桂尾

むつの花

桂守坊述著

桂尾の里椎守老師去し睦月二日
世を去り給ひし時悲しさや追ひぬ
魂を呼子鳥と悲嘆の涙をそゝぎし
も漸行弱れ定もやくなりし卯月
二日よりはまるより睦月の正當を
よふる越寶光禅院に法莚
開き追福の一巻をものし我老師を
追吟に韻を續きて靈前へし

道は五言絶句も七言も　六蛙
帝は象潟乃雨れ明石の　柳条
このはを乱のわきし旅衣　夕桂
常不知寝気不好嫌きはは　一瓢坊
河壁の苔にまつむしの窓　百十
桃の節句に川向へ来て　谷雪
遊び語の指てし足れ根しく　似扇
おもひ詫てや小そかさける　雨柳

庭られて竹吸ぬを翁かしき　香井
再天れ寛ま赤き夕栄へ　宇桂
来りし張夜をまき乾魚と　依桂
待のしハぬのかまりとも　鳳志
月来ま菱れうれ華し扇　桃里
すさむ嵐の止んでまれさ　斉仙
宴しを登り坂又下り坂　里柁
大事ちしあく嫁の指かさ　学秘

花に飽ぬ歎の雨気の子つゝく　百歳坊

ゑ向て捨し名に新らしき　執筆

右雅亭行

百ヶ日

經迎れ夢の夢より百ヶ日　文里

ゑ向て鳴る山ほとゝぎす　如女

降さうな暮見る空の雨もなし　箕浪

居ならぶとある身に荷付　山月

賑むまるを女の限を居て　利谷

思の暮当しの流行漂より　瓢紀

雲る名にあふ月の廻りこちれ　以執

律の声ある所の松　執筆

右八句表

慈父擬平の小祥忌にあたる子の
臘月二日なれとあら玉の春まとき
より此春月二日に引あけ営めるし
なり又死に仕ふるは生に仕ふる
ことくせよといへるもかゝる向にも生前
まけることのなりて今ハ不生不滅の
霊魂なしゝ御覧ずるらんやと是に
因みある人々を招請し露光招提
に法莚を設け経手向一巻を
ところの蘋蘩ハ菜に滲れも
我も深く墓前に捧け拈香
合爪しまいらす

新らしき石碑に鳴やまつくれ　暁潮

手向の香に雨き月寒　院主

折らしゝ桔梗の裾を引きりて　其風主

都しを想も秋なりけり　暁山坊

一気より沼多く諒の夏覚ぬ　　風虎

一国見事や跳て二夕月　　而明

摂りし蚊の二雨音や梅雨篇　　子裕

萩の花年向は露も行むきぬ　　（桔ヲ）知斗

開かきむしみ子もくと涙に　　（桂平妻）参女

日向ぞや旁もこれさん萬き　　（下山）如扇

余興

菊の香も今より露の流れ　　蒲雪丹

仙境らしき月の山路　　宜溪

化し香狐悟しの子に入て　　李溪

右略

文政十亥のとし　八月

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓